



# ラ・ポール通信

第 18 号 令和2年 1 月 1 日発行

有限会社ラ・ポールおとくにケアサービス  
京都府長岡京市長岡 2 丁目 9-3

法人理念  
信頼できる  
サービスを



あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお祈いします。

ナンテンの朱色が天に向かって伸びています。バラの実がだいたい色に色づき、水仙のアイボリーの花びらが穏やかな日差しをあびてほほえんでいるような。桜の落ち葉の、その幾重にも重なりあった葉の下には大きなクモがまるで暖をとっていたかのようにひそんでおり、掃くそばから右往左往して困っているような。

荒れた大海原に浮かぶ一艘の小舟のような半年を過ぎ、穏やかで静かな日々を過ごしています。

日々老いていく母を見、自分の老いと重ねます。「退職したらのんびりするぞ」と言う夫の老後のイメージは、〈卓球をしたり、ビリヤードをしたり〉だそうです。高校時代の友人が〈毎朝1時間散歩をし、馴染みの喫茶店でモーニングを食べるのを日課にしている〉のだそうで、そんな自分をイメージしているのでしょうか。

「元気なうちはいい。そのあとどうするの?」と聞いても答えられない。話をそらす。声をあげ、「そんなこと今は考えられない」と夫は言う。老いていく自分が想像できないのだろう。小さい声で「施設かな」と言う。いやいや、老いてしんどくなって、でも子供達には頼れない。子供達には子供達の生活があるから。そのあとはどうしようもなくなって自宅で住めなくなったら、それは「馴染みの家での生活」の限界だと思う。でも、そのしんどい時期をどうするのか、どうしたいのかと話がしたかったのだ。

翌日の日曜日の夕方、子供たちを招集し、夫抜き会議をする。3人とも口をそろえて「お父さんにはそんなことは考えられへんと思う。」と言う。この大きく切ない課題に今年取り組もう、夫の老後は私が考えようと決心した土曜日だった。



ナンテンのその玉のような  
美しい赤色が曇天の空と  
重なり宝石のように見えた。  
今年もいいことがあります  
ように。

米田 真澄